
性別人間と天界少年

凧金

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

性別人間と天界少年

【NZコード】

N5206Z

【作者名】

嵐金

【あらすじ】

あらすじ

性別人間こと、安藤未来。

彼女はある日、屋上で、天界から来た少年に遭遇する。

それが、かなり運命を左右する話になりそうで

これを読む前に『性別人間と吸血鬼』を読んでおけば、より楽しめると思います。

用語説明（前書き）

この小説はかなり業界用語的なものが結構出てくると思いますので、あらかじめ用語説明のページを作りました。軽く矛盾点もあると思いますが、生暖かい目で見てください。

用語説明

吸血鬼……太陽に弱いが、十字架やニンニクや聖水には強い。生まれつき特殊な力を持つものもいれば、血を吸うことしか能がない者もいる。日光に耐えられるレベルが10段階あり、10が最強。1が最弱とされている。

契約……吸血鬼が人間界で生きていく上で行う大事なこと。契約をした人間を、契約者パートナーと呼び、契約した吸血鬼は、その人間の血しか吸うことができない。契約のやり方は意外と単純で、その歯で血を吸うだけで契約が成立される。

吸血道具……「ごく一部の吸血鬼が所持している、白い宝石のようなもの。自由自在に形を変化させることができ、これを使えば人間と契約しなくても血を吸うことが可能。

吸血鬼の血……成長過程（二十歳以下）の人間が飲むと、身体に異常が現れるとされている。吸血鬼の血は、同じ吸血鬼にとつては人間の血以上に美味とされている。だが吸血鬼同士で吸血しあうことは向こうの世界では非常識とされている。

吸血鬼界……人間界とは違い、常に夜で、陰湿な雰囲気が漂う世界。王が国を支配しており、そこで生まれた吸血鬼は王に名づけをしてもらう。

人間界よりも法律が厳しく、ほとんどの罪の罰が”死刑”もしくは”吸血鬼の権利を剥奪”すること。

吸血鬼の権利を剥奪されると、吸血鬼の世界における住民票を削除され、吸血鬼の世界にいられなくなる。

天使……天界を住処とし、死人を冥府へ送る役割をしている。よく言つ、「恋のキューピッド」もいたりする。人間界にはたまに来ることがあり、その際、定期的に人間に憑依しなければ姿を保つことができない。

天使の血……天使が人間に憑依する際、人間に飲ませることで憑依が可能になる。

天界……人間界の上空、ではなく、吸血鬼界の上空に存在する。吸血鬼界とは違い、常に朝。

憑依……人間に乗り移ること。吸血鬼の場合、憑依されると、人間と身体を共有するため、憑依された人間は吸血鬼の分も含め、2倍疲れる。天使の場合は憑依されても吸血鬼のように2倍疲れることはない。

悪魔……人間には憑りつくことができず、魔界で契約を行つた天使、もしくは吸血鬼に憑りつく。人間の邪心から生まれ、自分の姿の元ネタを人間界で探し当て、それを元に姿を作つてから魔界に行くとされている。

魔界……吸血鬼界の地中深くにある世界。その全貌は吸血鬼もよく解つていらないらしい。

精神的ストレス……吸血鬼と天使でストレスの感じ方が違う。

吸血鬼の場合、ストレスが溜まると、理性が崩壊し、空腹でも無いのに手当たり次第に吸血しだす。

天使の場合、ストレスの捌け口がわからないため、個人差はあるが、物凄いスピードで身体が縮んでしまう。

用語説明（後書き）

こんな感じでしょ'つか。 それでは本編どひ'だ。

プロローグ

とりあえず質問だが、みなさんは”天界”って聞いたら、何を想像する？

考え方は人それぞれだし、どんな光景なのか、何がいるのか、どんなシステムか、それを想像するのの人それぞれだと思う。でも、いくつかの考えに共通しているのが、”生き物がいる。”という点だ。

多分、100人中100人、そう答えると思う。仮に違うという人がいても、それは少数派の意見だろう。

今回は、天界……つまり、天国から来た少年の話。

いつもと変わらない日常

俺が暁文あきふみと会つてから、大体1ヶ月が経つた。

暁文とは、吸血鬼であり、俺のパートナーである。……つい先日、吸血鬼の世界、”吸血鬼界”にいられなくなり、人間界の俺の家で同棲している。

そして今は、朝起きてすぐと、学校から帰つてすぐ、暁文に吸血される毎日を送つている。

吸血鬼は、一日3食が基本らしいが、俺の場合は学校がある。だから家に帰ることができない上に、血を与えると性別が変わってしまうため、どうしても昼は抜かなければならない。

なのだが、元々かなりの大食いであり、なおかつ、パートナー契約者の俺の血しか吸うことのできない暁文に、やつぱり一日2食はキツいようで、ごくたまに、俺の睡眠中に吸血することもある。

……実は、今日も……

「暁文いい！！！」

朝6時。俺は怒りMAXで飛び起き、速攻寝室を飛び出し、ソファで寝息を立てている暁文に掴みかかった。

「ん……。未来、どうかしたのか？」

しらばつくれる氣か、こいつ。

「てめえ！！睡眠中に吸血すんなって何度も言つたらわかるんだよー！」

物凄い剣幕で捲し立てるが、暁文はたいして悪びれる様子もなく、眠い目を擦りながら

「……腹減つたんだから仕方ねえだろ……。」

はあ。

「俺、今日学校あるんだけど？」

「……休めばいいだろ。」

「……そんな簡単に休むわけにはいかねんだよ。いいから早く女にじる。」

「はいはい……。」

暁文は渋々、俺の首に噛みついた。

「うつ……。」

耳元から、血を吸う時のざらついた音が聞こえる。いつものことだが、暁文は加減を知らないのか、なかなか性別が変わつても離してくれない。

……ので、急いでいる時は、性別が完全に切り替わった瞬間に暁文の頭を掴み、丁寧に素早く引きはがすようにしている。

「あつ……。」

引きはがすと、暁文は口元から血を数滴ほど垂らし、物欲しそうな声を出しながら、寂しそうな顔で私から離れた。

「暁文……もう少し上品に吸つてよ。」

「いや、時間があればもう少し上品に吸うんだけどな……。」たとえ時間があっても「こつまほ」上品に吸つことはないんだろうなと私は心の中で断言した。

登校（前書き）

読みやすこよひに行と行の間に隙間いれよつかなーとか考えてます。

「よつ、安藤！」

学校にて、誰もいない教室でまつたりしていると、佐川先輩が入つて來た。

佐川 紅丞こうすけ先輩は、私の1個上の先輩。

「…先輩、勝手に他のクラスの教室に入つちゃダメですよ。」

「なんだよ、つまんないこと言つくなよ。…で、最近どうだ?」

「どうだと言いますと?」

「暁文との生活だよ。あれからもう1ヶ月用ぐらいだ。そろそろ慣れ

たか?」

「もうずいぶん前に慣れているんでもう大丈夫ですが…睡眠中に吸血する、つてどこだけはなかなか改善してくれなくて困つてゐる

です。」

「ああー、まあそりや仕方ねえよ。吸血鬼つて1日3食なんだしさ…俺だつてよく寝てる最中、グレイに血を吸われることがあるんだ。」

「そなんですか?」

グレイとは、佐川先輩の家にいる吸血鬼。先輩は実は、そのグレイの契約者パートナーなのだ。

「うん。あいつなかなか食ひ意地張つてて、結構容赦なく吸いついてくるんだよ。…多分、暁文よりも大食いなんじゃねえかな?」

「まさか…それはあり得ないです。暁文よりも血を吸う吸血鬼なんて、多分いらないんじゃないんですか?」

「そうかもなー。俺、一度だけグレイに、貧血で倒れるギリギリまで吸わせようとしたことがあるんだけど、さすがにそこまでは吸えないと云つて言つてたよ。…安藤は大体どのラインまで吸わせたことがあるんだ?」

「うーん…私も一度だけ、2回性別が変わるまで吸わせたことが

ありますけど……さすがに2回も変わってしまうと、睡魔に勝てずそのまま眠っちゃいまして……覚えてないんです。」「性別が変わると睡魔に襲われるのか？」

「そうみたいなんです。」

実は私は普通の人間ではなく、さつきからチラつと話にはでているが、暁文に吸血される というより、一度に大量の出血をするとによって、性別が変わる体质なのだ。

これは生まれつきではなく、幼少期に一度、暁文の血を吸つてしまつたことにより、できてしまつた体质。：人間が二十歳を迎える前に吸血鬼の血を飲むと、身体に異常が現れる、私がその典型的な例、というわけだ。

一応言つておくが、吸血鬼の血を飲んだ全員が、性別が増えるわけではなく、日光に当たると消えてしまつ体質になつた人もいれば、不老になつた人もいる、という話だ。

「ふーん……ところでさ、安藤。」

「なんですか？」

「暁文に血を吸われている最中つて、何考えてる？」

「それは……特に何も。強いて言つなら、今回は加減してほしいなー」とかですかね。」

「実は、吸血中に何か物事を考へてると、それが血を通して、吸血鬼側に伝わつてることがあるらしいんだ。」

「え、そうなんですか？」

だつたら暁文の場合、加減してほしいつて気持ちが伝わつてんのに下限してないつてことになるのか。それはあんまりだ。

「いやいや、なにも毎回伝わつてゐわけなくて、時と場合によるらしい。……昨日、グレイが言つてた。」

先輩の表情が一瞬曇つた。

「先輩……もしかして昨日、”吸血中に何か妙なこと考へて、グレイの機嫌を損ねてしまつた”とか？」

「……相変わらず勘が鋭いな、実はそうなんだよ。」

「やつぱつ…。でも詳しく述べは聞かないでおおきます。」

「うん。そう言つてくれると助かる。」

佐川先輩の「ことだ、ビーセ女の子が機嫌を損ねるようなことを考えてたんだろ?」…グレイはああ見えても一応女の子なんだし。でも、確かにまあ、年頃の男子が少し身体の小さい女の子から血を吸われるつてのは、やっぱり何かくるものがあるのかもしれない。もちろん卑猥な意味で。

「先輩、見た目に反して変態ですよね。」

「……普通、それを実の先輩に直球で言つか?」

「事実なんだからいいじゃないですか、もう少し女の子の気持ち考えてくださいよ。」

「まーた安藤の説教が始まつた…。じゃ、俺もう教室戻るわ、じゃーなー。」

「あつ、まだ話は終わってな」

言い終わる前に先輩は勢いよく教室から飛び出して行つてしまつた。

「……誰に似たんだか…。」

追いかけてまで話を続けるのもなんだか面倒だつたので、やめておいた。

いろいろ変わつて・・・

俺の1個下の後輩、安藤 未来は説教癖が酷い。

いや、確認したわけじゃないんで本当かどつかは定かではないが、
多分そうだろ?。

悪く言うと説教癖が酷いわけだが、逆に、良く言うと正義感が強い、
ということになる。

一度、俺が部活をサボるうとしたところを、安藤に見つかってしま
い、”後輩だから、サボりくらい見逃してくれるだろ。”なんて思
つていたら、

「佐川先輩!! サボりなんてダメです!! もつ少し先輩らしくして
ください!!」

…と、その場で5分ほど、説教を受けたことがあった。

しかもあいつは、必ず目的を射たコメントを連発するので、揚げ足を
取ろうとする方が難しい。

だから必ず安藤の説教を聞くときは黙つて、終わるまでずっと聞い
ていることしかできないのだ。

…別の日、今度は安藤に見つからないようにサボることに成功し、
翌日、”さすがに現行犯で捕まつたわけじゃないし、説教はないだ
ろ。”なんて思つていたら、

「……佐川先輩、昨日サボりましたね? …学校中探し廻つたんで
すよ! ?」

…と、部活の最中、またしても5分ほど説教を受けてしまつた。
しかも”学校中探し廻つた”だと。…すごく申し訳ない気分にな
つて、その日以降、一度もサボつたことはない。

もちろん安藤も、風邪や、仕方ない用事がある時以外は、部活に必
ず来ていた。真面目に練習にも取り組んでいた。
俺はいつの間にか、安藤の人的好さと、完璧な部分に憧れるようにな
つっていた。…後輩に憧れる先輩も珍しい話だが。

だが、そんな安藤にも弱点……というか、誰にも言えない秘密があった。

それが、安藤の体質 性別が2つある、という部分だ。

始めは、そんなSFみたいなこと、ありえないと思っていた。でも実際に目の当たりにしたときは、さすがに鳥肌が立つた。

完璧な人間の秘密……本当に完璧な人間なんていない。と、心からそう思った。

でも、俺にその秘密を知られても、安藤は「他の人には内緒にしてくださいね？」と笑いながら言っていた。

”笑いながら”……こが重要だ。もし、俺に性別が2つあって、出血でそれが変わるとしたら 性別が2つあるという事実だけでも発狂しそうなくらい辛いことだというのに、安藤はそれを笑っていたのだ。

……完璧だつた。安藤未来は、俺なんか足元にも及ばないくらい、完璧な人間だつた。

だから、惹かれていつてしまつたのかもしれない。

ここだけの話、俺はいつの間にか、自分でも気づかないうちに安藤の事を好きになつていた。

まだ告白はしていない。……自分にそれほどの勇気が無いからだ。でも好きという気持ちは、どんどん強くなる一方だつた。安藤の顔を見るたび、胸が締め付けられるような気分に陥る。心臓がドキドキする。

……昨日、グレイが吸血している最中、無意識のうちにその事を考えてしまつた。グレイに俺の気持ちが伝わつてしまつた。

「……紅丞、未来ちゃんの事、好きなの？」

吸血が終わり、グレイにそんなことを聞かれた時はさすがに驚いた。

「……だったら、どうする？」

自分でも妙な返答をしてしまつた気がする。

「吸血中は、紅丞が何を考へてゐるのか、僕の方に伝わつてくるんだ

よ？」

それを聞いて、背筋が凍つたような気がした。

「……俺にだって、好きな人ぐらい、いる……。」

軽く見栄を張つていっても、声が震えていたせいで、グレイに少し呆れられてしまった。

「紅丞……頑張ってね。」

その言葉の意味を理解するのに、時間は必要なかつた。

友人

「未来ーーおっはよー」やいまーす！！」

教室に生徒がまばらに集まつてきたころ、友人の日比野綾子に大声で挨拶された。

”くん”付けじゃないだけマシだが、さすがに声が大きすぎるので、気に周りの視線がこつちに集中する。

「あ、綾子…ちょっとボリューム下げてほしい…。」

「まーまー、いいじゃないかー。挨拶は基本だよ？」

「朝からそんなに飛ばしてると、あとで疲れるよ？」

「大丈夫大丈夫！！私今日は1日中テンションMAXで過ごすつもりだからーー！」

「へ、へえ…そう…。」

綾子は、そう言つてはいるが、大体1時間目が始まる前に燃料切れを引き起こして、1時間目は睡眠時間で終わつてしまつ事がよくある。

ちなみに、先生に居眠りがバレないよう日夜研究しているらしいが、それでもバレた時、起こすのはなぜか私の役目になつている。

「…今日1日、テンションMAXつてことは、寝ないで過ごせる、つてこと？」

ダメもとで聞いてみた。

「いやー…必ず一度は寝るーー！」

断言された。マジか。

「それじゃあテンションMAXつて言わないじゃない。」

「いやいや、起きてる間はテンションMAXなんだつて…」

「それじゃあ1日中つて言わないじゃん。」

「うつ…。」

「…もう少し自分の言動に責任持ちなさいよ。綾子。」

「わ、わかってるよ…。」

綾子はトボトボと、自分の席に戻つて行つた。

綾子は、私の身体の秘密を知る少ない人間の1人。

先輩同様、一切公害はせず、気味悪がつたりもしない。：：ただ、こ
とある」とに私の事を”くん”付けて呼ぶ。そこだけは何とかして
ほしい。

以前、そのことを言及してみたら、

「大学の教授だつて、女人の事を”くん”付けて呼んだりするじ
やん？：：それと同じだと思えばいいよ。」
：：あなたはまだ高校生だろうがつ！！

友人（後書き）

綾子のキャラが安定しないつ！！！

もうわけわかんないです。

屋上にて、遭遇

俺たちの通う高校は、なんと、屋上に自由に入り出しができる。

「もちろん、先生には無断で、だが。

実をいうと、数日前から屋上の入り口の扉の鍵が壊れていて、簡単に開くようになつていて、カップルや、一人になりたい人などの絶好の穴場になつていて。

今日は珍しく暖かい上に、天気が良かつたので、昼休みに安藤の目を盗んで屋上に侵入した。

「ふあ～っ……。」

広々とした屋上の真ん中で背伸びをする。

「はあ……安藤が別のクラスだつてことだけが救いだな……。」

安藤が普段の俺の授業態度を見たら、もしかするとマジでキレるかもしれない。それぐらい俺は授業態度が悪い。屋上ならだれもいなし、ボヤき放題だ。

「……しかし……本当、安藤が他クラスの後輩で、本当に助かつた……。」

「何の話ですか？」

「いやいや、ちょっと後輩の安藤の事でな……。」

……ちょっと待て、今、俺の後ろから話しかけたのは誰だ?
聞き覚えのある声……。

恐る恐る後ろを振り返り、入口を見る。
そこにいたのは

「私がどうかしたんですか? 佐川先輩。」

安藤未来だった。

「うあっ! ? あ、安藤! ? どうしてここに! ?」

「どうして、つて……佐川先輩がここに入つていくのが見えたんで、
追いかけてきたんです。」

「え? ……誰も見ていないと思ってたのに……」

「いえ、正確には”誰かが入つていくのがチラッと廊下の隅に見え
た”んです。……で、こんな所に来るのは佐川先輩ぐらいかなーなん
て思つて、追いかけてきたんです。」

実は、屋上へと続く階段は、安藤のいる教室のすぐ近くにある。
ちゃんと安藤が近くにいないことを確認したつもりだったのだが、
迂闊だった……。

「……さて、先輩、戻りましょうか?」

「……嫌だ。」

「何ですか?……」ここは普段は立ち入り禁止ですよ?」

「べ、別に、いいだろ、ちょっとくらい……大体、立ち入り禁止なら、鍵の修理くらいしろつう話だよ……。」

ヤバい、声が震えてる。いつも以上にドキドキする。目が合わせられない……。

「先輩、ちゃんとこっち見て喋って下さい。あと、こここの鍵の修理ができない理由は、単に費用が足りないだけなんですから、仕方ないじゃないですか。」

「い、いや、そうだけど……。」

「……先輩?顔赤いですよ?……具合でも悪いんですか?」

原因であるお前がそれを言うな。と言いたい気持ちを抑えつつ……「べ、別に大丈夫。心配しなくていいから。」

「そうですか?……じゃあ、戻りましょうよ。ここにこることが先生にバレたら怒られますから。」

「あ、ああ……俺、あとで戻るから、先に戻つててくれ……。」

「……それ、絶対戻る気のない人の言葉ですよね……往生際が悪いですよ、戻つて下さい。」

そう言つと、安藤は俺に歩み寄り、手を引っ張つてきた。

「あつ……俺たち、今、手え繋いでる……心拍数が上昇してる……顔が熱い……。」

「わ、わかったよ!戻るから、手え離せつて!」

「駄目ですつて!ほら、動いてください!!!」

動く気はあるのだが、緊張のせいか脚が全然動かない。

俺……末期だな……。

そう思い、ふと空を仰いだ……すると。

「な、なんだ?あれ……。」

「え?」

安藤も手を止め、思わず空を見上げた。

そこにあつたのは、空に輝く星のようなものだつた。
でも、こんな昼間に星…？

その星は、ただの星ではなく、なんといつか……動いていた。
要するに、流れ星だ。

俺は、流れ星の正体は、隕石だと思つていて。
こんな時間に隕石……夕方のテレビはこのコースで持ちきりにな
るかもしない。一体どこに落ちるんだ？……それとも、空中で自
然消滅かな？

「あの……先輩。」

手をつないだままの状態で、安藤が俺に話しかけてきた。
「な、何だよ？」

「あれ……」口ひきに向かつてきてしません？」

「……え？」

安藤の言葉を頭の中で反芻しつつ、俺は再び空の星に目を向ける。
「うーん、確かに、こっちに向かつてきてるなあ……間違いないな
あ、どーすっかなあこれ。逃げた方がいいのかなあ、逃げた方がい
いんだろうなあ、うん。

その瞬間、俺の脚は一気に覚醒した。

ぎゅっ、と安藤の手を握りかえし、猛ダッシュで走り出した。

「わっ！？ 佐川先輩！？」

あれ、どう見たってやべえだろ！……こっちに向かってきてるなんて何でもうと叫く気が付かなかつたんだ！？

頭の中で後悔の言葉を並べつつ、安藤を引っ張り屋上の入り口を指す。

だが、隕石はそれよりも速いスピードで屋上に到達した。
そして、屋上に衝突 はしなかつた。

「……あれ？」

まさか……屋上に到達する寸前に自然消滅した……とか？
なんて思いつつ、俺と安藤は同時に振り返った。

隕石は、屋上に当たるわずか数センチ上で、静止していた。

「「え？…どう言つこと？」」

俺と安藤は同時に疑問の言葉を述べた。

屋上にて、遭遇（後書き）

行の間開けすぎたか心配です。

隕石の正体

……いきなりだけど、想像してみてほしい。

自分の目の前に隕石が落ちてきて、それが地面に当たるわずか数セントメートルで静止している光景を。

空中に浮いたまま、ピクリともしない隕石……なかなか滑稽なものだと思つ。

今私の目の前には、それがある。

隣で私の手を握っている佐川先輩も、同じものが見えているらしく、茫然と立ち尽くしている。

「……あれ、何なんでしょうね……？」

「いや、隕石……だる。」

「先輩……空中で制止する隕石なんて、見たことがあります？」

「……無い。つーか、隕石自体初めてだ。」

「偶然ですね、私もなんですね……ところで先輩。」

「何だよ。」

私は先輩の方を向き、こう言い放つた。

「……いつまで手、握つてるつもりですか？」

「え？……つわあ！……ごめん！！」

先輩は驚いた声を出しながら、私の手を離した。

……かなり強く握つていたらしく、私の手にはうすうらと痕が残つていた。

再び隕石の方を向く。

微動だにせず、そのまま静止状態にある隕石。……いったいこれはなんのだろうか？

「……危険がないなら、触つてもいいかもな……。」

佐川先輩が急にそんなことを言い出し、隕石に向かって歩き始めた。

「せ、先輩！！危ないですって！！危険ですよ！！！」

必死に呼び止める。でも先輩の耳には入っていないようだった

「先輩！！」

私は走り出し、後ろから抱きしめるように先輩を止めた。

「危ないですから、さがって下さい……！！」

……なんかこれじゃあカップルみたいじゃないか…。

「ご……ごめん。」

震えた声が聞こえ、先輩の身体中の体温がどんどん上昇しているのが腕を通して伝わってきた。

……大丈夫か？この先輩。

なんて思いつつ、私はそっと腕を離した。

その瞬間

隕石が、全体から光を発し出した。

「「うわっ！？」」

まぶしき光に、私と先輩は同時に目を瞑ってしまった。

目を開けると、そこには隕石はなく、代わりに

「あ、安藤……あれって、まさか……”人”か？」

小学3年生くらいの、少年が横たわっていた。

隕石の正体（後書き）

とんでもない設定を入れたせいでお若干後悔していますorz

さつきは本当に危なかつた。

隕石から声が聞こえたのだ……。「安全だから、近づいてもいいよ」的な感じの声が。

それに惑わされて、思わず歩み寄つてしまつた。

そして、安藤に後ろから抱きつかれた。

全身の体温が一気に上昇し、瞳孔が広がり、息が上がり、心臓は壊れたように鼓動を速め　俺の思考は完全に停止した。

……5秒くらい、記憶が無い。

そして、今。

目の前にあつた隕石は消滅し、代わりに、人　”少年”が横たわつていた。

……今度は、安藤がその少年に近づいて行つた。俺も後に続く。

「先輩……これって……」

間近で少年を見て、俺たちは息をのんだ。

グレイのような……金色の髪、でも

「……歯が無い。」

ゆつくりと口をこじ開けてみたが、グレイのような吸血鬼特有の鋭い歯は無かつた。人間のよう、普通に歯が並んでいるだけだった。てことは、吸血鬼ではない……。

俺は思考をめぐらせ、とつさにある行動に出た。

「……ちよつと待つて、グレイに聞いてみる。」

「聞いてみるつて……どうやつてですか？」

安藤の質問に応えるよつて、俺は制服のポケットから携帯を取り出した。

電話帳を開き、自由に電話を掛けむ。

「もしもし、紅丞?」

「ああ、俺だ。……ちょっと、時間あるか?」

「うん。どうかした?」

「さつき、俺たちの目の前に隕石が落ちてきてだな……。」

「え! ? ドココトー?」

「まあその辺は後で話す。とりあえず、今から学校の屋上って、来られるか?」

「うーん……ちょっと待っててくれれば、すぐ行けるけど。」

「わかった。じゃあまた後で。」

俺は電話を切った。

「先輩、グレイを呼んだんですか?」

「ああ。……」うつ時は、似たようなやつに相談するのが一番だと思つてな……。」

「……まだグレイの専門だつて決まったわけではありませんよ?」

「それでも気休めぐらいにはなるだろ。」

その時

タンツ

と、何かが着地する音が聞こえた。

音のした方を見ると、そこには、グレイが立っていた。

びっくりするほど紅添つてピュアですね……

「「速つ……?」「

あまりにも早すぎる登場に、私は先輩と同時に驚愕の声を上げた。
「いやあ、紅丞の家つて意外と学校に近いから、すぐ来られるんだ
よ。」

「それは知らなかつた……。ていうか、グレイ。」

「何? 未来ちゃん。」

「…今、昼間なんだけど、なんで羽があるの?」

「ああー…僕ね、満腹状態だと羽をはやすことができるんだ。」

「満腹つて…誰の血を吸つたの?」

「…誰の血も吸つてない。…強いて言うなら、紅丞が眠つてる最中に

コツコツためてきた血を飲んで来たんだよ。」

グレイの言葉に、先輩は思わず声を荒げた。

「お前、そんなことしてたのか!?」

「うん。…気付かなかつたの?」

「いや、寝てる間に吸つてるんだなーとは思つてたけど、まさか溜
めてるとは思つてなかつた……。」

「紅丞の血は、保存状態が良かつたのか、かなり質が保たれてて、
味落ちだけが心配だつたんだけど、それが無くて、そこだけは意外
だつた。」

「へ、へえ……。」

「でも、やっぱり僕は紅丞よりも未来ちゃんの血の方が好きだけど

ね。」

「…俺、なんか凹んだ…。」

「これ、私は喜んでいいの…?」

なんだかいろんな意味で先輩に申し訳ない。

つて、こんな話してる場合じゃなかつた。

「グレイ、この子…知らない？」

私はとりあえず目の前に横たわつてゐる少年に目を向けてた。

グレイは、少年の顔を覗くと、こう言つた。

「…この子、天界の子だよ。」

「天界の子？」

「俗に言つ……”天使”だね。」

その言葉に、佐川先輩が即座に喰いつく。

「でも、羽が無いけど……天使つて、昼間は羽が無いんだっけ？」

「いや、僕の場合は吸血鬼の血も混ざつてゐるから、昼間は消えちゃうんだけど、普通の天使は常時、羽はあつたままだよ。」

「じゃあなんでこいつには羽が無いんだ？」

「多分……見習い天使なんだと思つ。」

「見習いって……どういうことだ？」

「そのままの意味だよ。…天使は、羽が生えるまで人間界で修業することになつてるんだ。」

「修業…つていうと、羽が生えるまで人間界にいる、つてことか？」
「そういうことになるね。まあ僕は吸血鬼の血が混じつてゐるから、生まれつき羽がある。だから修業は必要ないんだけどね。…ところで、紅丞、この子…どこから来たの？」

「ああ、さつさき、”目の前に隕石が落ちてきた”って言つただろ？」

「うん。」

「正確には、落ちてきたんじゃなくて、衝突する少し手前で制止したんだ。」

「制止したの？」

「ああ。それで、隕石がいきなり光りだして…で、気がついたらこの状況だ。」

「…わかつた。」

そして、グレイはこう言つた。

「これはあくまで推測だけど……この子は、天界からなんらかの方

法で人間界にやってきて……でも、どこかでやり方を間違えて、何とかこの場所に不時着……というか、流れ着いて、今は気を失ってる状態、つてことだね。」

不時着とか言つと、まるで宇宙人のような扱いだが、そういう話ならなんとなく納得できる。

「……佐川先輩、この子、どうじましょ？？」

「どうする、つて？」

「気が付くまで待つてみます……でも、もう時間無いですよ。あと5分くらいで昼休みが終わつてしまつ。

「あ、それなら僕に任せて。」

グレイはそう言いだすと、軽々と少年を抱き上げた。

「グレイ、どうする気だ？」

「紅丞達が帰つてくるまで、家で預かつてもいい？」

「えつ……まあ、別にいいけど……。」

「ありがと。それじゃあ

飛び立とう、としたその瞬間、羽がすうー、っと、まるで光に溶け込むように消えてしまった。

「……紅丞、血、飲ませてもいい……？」

「あ……仕方ねえな……。」

グレイは、再びその場に少年を下すと、先輩の肩にしがみ付いた。

「……ごめんね、すぐ終わるから。」

「わかつたから、やるなら早くしろ。」

「うん……。」

グレイは素早く、佐川先輩の首に張つてある絆創膏を歯がし、首筋に噛みついた。

先輩の顔が一瞬苦痛の表情に染まつたが、すぐに普通の表情に戻つた。

数秒後、グレイは先輩を離した。

「つ……。」

先輩はよろけてその場に膝をつく。

「先輩、大丈夫ですか？」

私はすぐに先輩に駆け寄る。

「…大丈夫……っていうか、グレイ、ちょっと吸い過ぎじゃねえか？」

「うん……満腹じゃないと羽がでてこないからさ…。」
そう言うグレイの背中には、すでに羽が出現していた。

「それじゃ、僕もう帰るね。」

グレイは素早く少年を抱き上げ、飛び去ってしまった。

ソフトの上で作業している感じがつかない状態でマウスが動かされると
ですね。

「なあ、安藤。」「あつ、先輩。またサボります?」「何で後輩に話しかけただけでサボり扱いされなきやいけねえんだよ、いい加減にしろ。」「そう思われたくなかったらちゃんと練習してくださいよ、さつきから何もしてないじゃないですか。本当に、何のために部活入ったんですか?」「べ、別にいいだろ……それよりも、あの天界の子の事についてなんだけど……。」「あの子が、どうかしました?」「いや……ちよつと気になつてな。天界つて……どんなところなんだろ?って思つて。」「天界つて……天国のことじゃないんですか?」「そりなのが?」「なんとなく、推測ですけど……。」「うーん……俺には分からない。やつぱりいつの人は本人に聞いた方がいいのかもな。」「それ以前に、向こうに人間の言葉つて通じると思います?」「天界の言葉じやなきや伝わらないってことか?」「もしかしたら、ですけどね。……なんか気になつて来たんで、今日は先輩の家に寄つてつてもいいですか?」「え?……俺の家に来るの?」「そうですけど……駄目ですか?」「いや、構わない……。」

……部活中、上記のような会話の末、安藤未来が俺の自宅に来ることになった。

普段、色んな後輩を家に招いているので、散らかってはいらないのだが、なぜか無駄に緊張した状態で安藤を招くことになった。

家の前にて。

「なーんか、先輩の家つて無駄に広いですよね。…思つたんですけど、先輩の両親つて、何やつてるんですか？」

「ん?……ああ、父さんがどつかの会社の設立者で、母さんがCAやつてる。」

「CAつて……客室乗務員ですか？」

「そう……どこの航空会社かは…忘れちまつた。」

「結構なお金持ちじやないですか……それならもつといい場所に住めばいいじやないですか。」

「俺の親さあ、あまり、その……”金持ちっぽい感じ”を出したくないらしくつて、ほら、家の前に止まつてる車も、普通の車だろ?」「ああ、確かにそづですね…てことば、”金はあるのに使わない”つて事ですか?」

「そづだな。」

「もつたいないですね……私だつたらもー少し裕福な暮らしありますよ。」

「俺もそつしたいんだが、親が厳格でな…”金は、高級品を買ったために使うんじやなく、日常生活や、もしもの時のために使うんだ”つて言つてんだよ。…ちよつと広い家に住んでる癖に、何言つてんだかな…。」

「気持ちはわからりますけどね。」

「安藤の両親は何やつてんだ?」

「うーん……私もよくわからないんです。」

「そづなのか?」

「はい。強いて言つなら、父がどつかのNGO団体に所属してて、今、海外でボランティアやつてます。で、母が秘書やつてます。会社名は…忘れました。」

「安藤もたいして俺と變んないじゃねえか…。」

「そうですか？でも、私の両親、今2人とも家にいなくて、私一人なんですよ……あ、暁文がいますけど。」

「あ、俺も今、家に両親いないぞ。」

「何ですか？」

「2人で海外に出張つて聞いてる。……出張つて言い張つてるけど、どーせ海外で遊んでるんだろーよ。あの馬鹿夫婦……。」

「そういう言い方しちゃダメですよ。親なんですかから。」

「まあそただけどな。じゃ、上がつてくれ。」

「失礼しまーす。」

家に入るなり、玄関にグレイが走つて來た。

「紅丞、おかえりー！……つて、未来ちゃんもつれてきたの？」

「ああ。さつきの少年の事が気になるつて言つもんだから、連れてきたんだ。」

「ふーん……まあいつか。」

「……ちょっと、グレイ。私、もしかして邪魔？」

「いやいや、そんなことないそんなことない……。」

グレイは少し疑うような目で俺を見てくる。

「……それよりも、グレイ。あの少年、気が付いたか？」

「いや、まだ。……紅丞の部屋に運んじゃつたけど、良いよね？」

「別にいいけど……。」

その時

ガタンッ！！

何か、物が落ちるような…かなり大きい音が俺の部屋の方から聞こえた。

「な、何！？」

安藤が過剰反応する。

「……ちょっと見てくる。」

グレイは至つて冷静にそう言つと、早歩きで階段を昇つてつた。

「俺も見てくる、安藤はここにいる。」

「は、はい…。」

俺も階段を昇り、自分の部屋に向かう。

天使

目の前に天使がいる状況つてのは、恐らく想像するのは小さな子供くらいだろう。自分には天使が見える、とか、中2っぽいことを考える奴もいるかもしない。

俺はそういう種族の人間ではないので、いまいちどんな気分なのかはわからないが、多分こういうことを言うのかもしない。

……ということで、今俺の目には、天使が2人いる。

正確には、”天使の血が混じった吸血鬼”と”天界から来た見習いの少年”なわけだが。

「…………。」

俺の部屋の中心に立つてる少年は、グレイを軽く睨みながら、何も言わない。

……少年の瞳の色が赤かった。

以前、グレイから聞いたのだが、グレイは吸血鬼の血のせいで元々目が赤いので、怒りの感情である”赤”は、赤ではなく”黒”で表される。

でも普通の天使は、通常時、目の色は黒。よって、怒りの感情はちゃんと”赤”で表される。

「君、見習いの天使だよね？」

グレイは少年を見ながらそう言った。

「…………。」

声は出さなかつたものの、少年は軽く頷いた。

「そつか。僕、グレイっていうんだけど、君は？」

「…………。」

少年は何も答えない、ずっとグレイを睨み続けている。

「先輩？大丈夫ですか？」

ふと、安藤が俺の部屋に入つて來た。

「…………！」

少年が安藤を見た瞬間、驚いたような顔になつた。
そして、安藤めがけて走り、飛びついて來た。

「あつ…………？」

安藤は少し驚いたような声をだした。

「ちょ、ちょつと…………。」

少し引きはがそようと抵抗するが、制服をがつちりと掴んでいたからしく、なかなか離さない。

「先輩……グレイ……どうしよう?..」

「どうするつて……質問しても何も答えないんじゃあ何もできないよ。もしかしたら、未来ちゃんの言葉には反応するんじゃないかな?」

グレイがそんなことを言い出した。

「で、でも、私、子供そんな得意じゃないし…………。」

「そこを何とか……ね?」

「……わかった。……ねえ、君、名前は?..」

「…………瀬夏。」

グレイと同じく、綺麗な声で、そう呟いた。

「瀬夏?」

「……月見瀬夏。」

「…………素敵な名前だね。」

安藤は少し気まずそうに答えた。

「ありがとうございます……。」

少年　瀬夏は、安藤を見て少し微笑んだ。

「多分、この子は未来ちゃんが面倒見た方がいいと思つよ。」
グレイが断言した。

「え？……でも、私…どうしましよう…先輩…。」

困つたな……昔から子供だけは苦手で…それを家で面倒見るなんて…難しそうさ。

「こういつ時は、本人に聞いた方がいいんじゃないのか？」

先輩はそう答えた。すると

「……僕、この人の所がいいです。」

私が質問するまでもなく、瀬夏はそう言つた。

「決まりみたいだね。」

「そんな……私、本当に子供の扱いなんて知らないし、第一、ビリやつて接すれば……。」
「普通でいいと思うよ。僕に接する時みたいに、瀬夏君に接してみればいい。……多分。」
「多分つて……。」

グレイは中身は大人だからまだいいが、瀬夏はおそらく中身も子供だろう。……問題が山積みだ。

でも、瀬夏はなかなか私を離そうとしない。

「……わかった。私の家で預かることにする…。」

「うん。……そうしてもらった方が、この子も喜ぶと思うよ。」

グレイの言葉を頭の中で反芻しながら、私は佐川先輩の家を出た。

……道中、瀬夏は私にしがみ付くように歩いていた。

「……ねえ、もう少し離れないで、歩きにくらいんだけど…。」

瀬夏は私の制服をしつかりと掴み、離さない。

「はあ……仕方ないな…。」

私は立ち止り、その場にしゃがんで瀬夏に目線を合わせる。

「瀬夏、甘えたい気持ちはわかるけど、もう少し限度を考えてほし
いな。」

「……言い過ぎただろうか、でもこれしか言い方が思い浮かばない。
「……」」めんないさい。」

瀬夏は少し泣きむづな顔で答え、制服から手を離した。

「いや、その……苛めようつてわけじゃないからね？それは……わか
るよね？」「はい……」

「まいっただな……泣かれちゃ困る……あ、そつだ。

「じゃあ……手、繋いで行こつか。」

立ち上がり、手を差し伸べると、瀬夏はその手を握った。……本当に
小さい、子供の手だ。

私たちは、薄暗くなつてきた道を歩き、家まで帰った。

「うん。」

「こんな言い方するのは変だけど……ちゃんと世話できんのか?」「ペットじゃないんだから……ちゃんと面倒見るよ。」

「だって、未来、子供苦手じゃなかつたか?」

「そりやそりや……瀬夏が、私がいひつて言ひつかり、仕方なく何とかなるよ、多分。」

幸いにも、礼儀正しそうな子供のようだし……礼儀正しくないから子供つて嫌いなんだよね。

「ふーん……そいつ、瀬夏つていうのか?」

「そう、月見瀬夏。……そうだよね?」

私は脚にしがみ付いている瀬夏にそう聞いた。

「……はい。」

どうやら瀬夏は、吸血鬼を見るのは初めてのようだ、部屋に帰つて来た時から、かなりビクビクしていた。

とりあえず瀬夏の警戒を解くために宥めることにする。

「瀬夏、怖がらなくてもいいから、むしろ怖いのは吸血中だけだから。」

「これ、本当。」

「未来、変な事植えつけてんじゃねえよ、俺は吸血中も普通だ。」

「あれのどこが普通なのよ、普通なら壁に押し付けたりしないでしょ。」

「あれは”俺にとつての普通”だ。」

「んでもない屁理屈言いやがつた……。」

「……まあいいや。瀬夏、おいで。」

とりあえず瀬夏を寝室に招く。

実は、屋上で見つけた時から、服が少しボロボロだった。着替えさせないといけないかもしね。

「えつと……昔の服あつたかな……。」

寝室の押入れを適当に漁る。

「……あつた。」

昔お気に入りだった洋服を引っ張り出す。：小1の時に、性別の事が判明したので、男用の服も女用の服も両方ある。

……小さこころから出費の多い子供だったなあ……。母さん、この場を借りて、『めんなさい。ありがと』。

「これ、着てみて。」

瀬夏は服を受け取り、ベッドに置くと、その場で今着てる服を脱ぎ始めた。

案の定、肌は白く、綺麗な体型だった。まるで、何かの芸術作品のようだ。

「あの、未来さん。」

と、急に名前を呼ばれた。自己紹介しないはず……あ、グレイとの会話を聞いてたのか。

「な、何？」

「僕の服……どうしましょ？」

瀬夏はボロボロの服を手に、呆然と立ち直りしてくる。

「え？……あ、もう一度着るんだつたら、洗濯するけど、どうする？」

「うーん……穴も開いてますし、捨てもうかるとありがたいんですけど……。」

「じゃあ、捨てておくよ。」

「ありがとうございます。」

瀬夏は微笑みながら私に服を手渡した。

「それで……服のサイズ、どうかな？」

「あ、ピッタリです、ありがとうございます。」

瀬夏は満面の笑みで服に袖を通した。

「……よし、ピッタリみたいだね。じゃあ、脱いで。」

「え？…何ですか？」

「いや、だって、瀬夏、屋上に倒れてたんだよ？お風呂入らないと…。」

「…じゃ あなんで着せたんですか。」

「本当にピッタリかどうか確認したかったのよ。」

「せつかく気に入ったのに…わかりました。…あ、未来さん。」

「何？」

「お風呂、僕一人で入りたいんですけど……良いですか？」

「え？あ、うん。別にいいけど…。」

「ありがとうございます。」

私と瀬夏は、とりあえず脱衣所に移動した。

吸血

「未来。」「

「何?」「

「…腹減った。」「

風呂上り、瀬夏の髪をドライヤーで乾かしている最中、暁文にそんなことを言われた。

「今忙しいから、後にして。」「

「わかつてるけど、忘れんなよ?」「

「わかつてるって。」「

瀬夏はドライヤーの温風を浴びてる間、ずっと笑顔だった。……いるよなー、ドライヤーの温風が好きな奴……。

「…ほら、もう乾いたよ。」「

「ありがとう」「ざこます、未来さん。」「

瀬夏はゴキゲンだ、いつも笑顔だとそのつま調子に乗つそ�で怖い。子供つて調子に乗ると面倒だからなあ……。でも、瀬夏に限つてそれはないか。

「あ、瀬夏、寝室に行つて待つてもらつてもいい?」「

「いいですけど……どうしてですか?」「

私はドライヤーの「ードを束ねながら答えた。

「暁文に血を上げないといけないの。言つたでしょ?あいつ、吸血鬼だつて。」「

「そういえば……でも、大丈夫なんですか?だつて、吸血中は怖いつてさつき言つてましたけど……。」「

鵜呑みにしてる……!」「

「え、あ、いや……まあ、瀬夏が見たら怖がるだらつないと思つて……私は平気なんだけどね。」「

「そうですか……わかりました。」「

瀬夏はそう言つて、脱衣所を飛び出し、寝室に入つて行つた。

「……さてと。」

暁文は、昼も夜も食べていない。現在夜8時。瀬夏が思つた以上に長風呂だったので、そんな時間になつてしまつた。

「未来。」

暁文が呼んでいる。

「はいはい……。」

リビングへ向かうと、暁文がソファに座つて待つていた。

「未来、遅いぞ。」

「別にいいでしょ。」

私が暁文に近付くと、暁文は素早く私の肩を掴み、立つたまま首筋に歯を刺した。

「つ……なんかさ、最近、吸うとき結構乱暴じやない？」

「これが俺にとつての普通だ。」

暁文は、さつきと同じセリフを言い、血を吸い始めた。

「つづ……。」

心臓が、まるで吸血を拒むように激しく鼓動を繰り返している。

……まあこれも、いつもの事だ。1ヶ月も前から毎日続けている事。そして、その度に、性別が変わるときの痛みに耐えなければならぬ。い。

……今までずっと、吸血されるときの痛みかと思つていたが、それは違うようだった。

吸血されるときは、歯を刺して、血管に穴をあけ、歯を抜いてから穴に吸いついて吸血する。

ので、実際、歯を刺してから吸血が終わるまで、痛いのは”歯を刺すとき”と”刺した歯を抜くとき”の2回だけ。今私に襲いかかっている痛みは、性別が変わるときの痛みなのだ。

髪が短くなり、性別が完全に切り替わる。 強烈な睡魔が、俺を襲う。

「……終わったぞ。」

暁文が俺を離した。

「え？…もういいのか？」

いつもは性別が変わっても吸い続けるはずなのに…。

「今日はもういい、明日の楽しみにしておく。」

「わかった……じゃあ俺もう寝るわ。」

実は、瀬夏が入る前に俺も既に風呂に入つておいてたので、とりあえず寝室へ向かう。

「未来。」

寝室へ向かおうとする俺を、暁文が呼び止める。

「なんだ？」

「性別のこと……瀬夏には言つておいてあるのか？」

「……忘れてた。」

「未来……最近凡ミス多いな。」

「いや、本当…誰のせいだらうな。」

俺は軽く暁文を睨む。

「なんだよ。俺のせいいか？」

「いや、別に…。」

あやふやな返事を返し、俺は寝室への扉を開けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5206z/>

性別人間と天界少年

2011年12月17日20時04分発行